

男子便所の小便器前には「トイレは清潔に」とか「いつもキレイに使ってくれてありがとう」あるいは「一步前へ！」とか注意書きがあったりする。韓国・ソウルの公衆便所で「男がこぼしちゃいけないのは涙だけじゃない」という注意書きをみつけたことがある。いかにもユーモア好きの韓国人らしい。思わずくすりとした。

ソウルの注意書きは「男は涙をこぼさない」という前提があって初めて意味をもつ。江戸時代の日本へやってきた朝鮮人外交使節も男は涙を流さないことを論じ、東洋史研究者の夫馬進も、18世紀半ばの朝鮮人は男が涙を流すのは恥ずかしいと考えていたことを指摘する。

けれど、19世紀初めに朝鮮半島西海岸に漂着し、その地で3週間ほど朝鮮人官僚と漢詩をやりとりしたり一緒に食事をしたり、筆談で心を通わした薩摩藩士安田義方は、日本へ帰国する船上でさめざめと涙を流した。見送る朝鮮人官僚も嗚咽して別れのことばに詰まった。

男だって涙を流す。別れの悲しみに堪えきれなくて声を上げて泣く。ぼくもソウルを往復する飛行機のなかで韓国映画を見て、あまりにも悲しくてボロボロ涙をこぼすことが再々ある。

少し古いけれど、丸谷オーが「男泣きについての文学論」なんていう文章を書いていることに気がついた。「日本文学のなかで男がどんなふうに泣いてきたか」を丁寧に調べあげた仕事だ。古い時代から日本の男は実によく泣いたらしい。

池内敏 教授

オンライン上で得られた画像
「男がこぼしちゃいけないのは涙だけじゃない」



例えば、友達に差し出した何気ない手紙、あるいは好きな人からもらった気持ちの溢れるラブレターがあるとしよう。それが、いつか貴重な資料として読み直されるかもしれないと考えてみる。誰に送ったか、何で送ったか、どんな気持ちで書いたか、などなど。全部とは言わないが、少なくとも一つくらい考えて、想像してみるだけで面白いことではなからうか。その面白さこそ文化研究の醍醐味ではないかと思う。

日本文化学講座では、文学作品の中の文化表象を研究している人が一番多い。講義以外でも、読書熱心な人は自ら勉強会を開き、みんなと一緒に同じ作品を読んで、討論している。例えば、芥川賞作品勉強会では、受賞した作品を通して震災後の生活、障害者のケア、コロナの中で生きる難しさなどについて様々話し合った。

そのほか、金沢大学、台湾大学のような国内、海外の大学と共同で研究会も行った。ほかの国、地域、それぞれ違う場所出身の人々と交流して、研究で繋いで、お互いに視点を補い合うこともできる。

ただし、これらの机上の学習だけではなく、明治村で夏目漱石邸のような作家ゆかりの建築物を多く見学したり、金沢で文学散歩もした。室生犀星、泉鏡花、徳田秋聲などの文豪ゆかりの土地、文学館に自らの足を運んで、自分の目で体験して、自分の中で色々想像した。俳人でもある私にとって、一番印象深いのは、『おくのほそ道』の俳句と「一笑塚」だった。それを見ていると弟子の早世を嘆いた芭蕉翁はどんな気持ちだったのだろうと思わず考えてみた。

特に個々の多様性が重要視されている今の社会において、よく読んで、よく交流して、よく見て、「文化」を色々考えるのは肝要かつ面白いのだ。

李哲宇 博士後期課程1年

塚も動けわが泣く声は秋の風



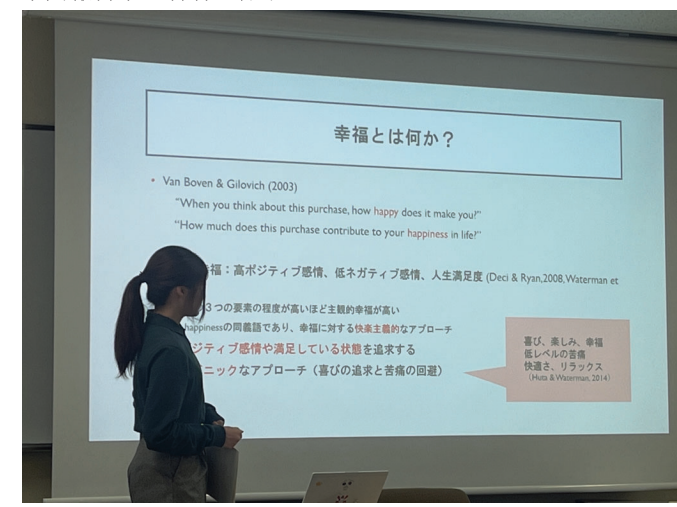
名古屋大学文学部で学ぶ心理学は、主に実験心理学という分野です。「なぜ人間がとある行動をするのか」という疑問について科学的に研究しています。具体的に言うと、実験を組み立て、データを取り、それらのデータを分析することで、「人は〇〇の条件下で××を行う傾向がある」、「△△な傾向がある人は□□をしやすい」というような現象を、その背後にあるメカニズムと合わせて明らかにしていきます。そのため心理学専攻の授業では、感情や認知機能に関する座学に加え、自分達で仮説を立てて実験を行う練習やデータの解析方法なども勉強しています。皆さんの思い浮かべる文学部像とは少し異なるかもしれませんが、手段として理系のような方法を用いているだけであって、「人間を知る」という本質は他の文学部の専攻と変わらないと感じます。文系と理系の融合のようでとても面白いですし、疑問に感じたことを検証し、事実を確かめることができる所が私はとても好きです。

私はお買い物が大好きなので、現在、人の消費行動と幸福感に関する研究を行っています。私自身は服や家具などの物を買うことが好きなのですが、先行研究では「物の所有のためにお金を使うよりも、旅行や外食などの経験にお金を使う方が幸せだ」ということが示されています。そのような現象に疑問を感じ、なぜそれが起こるのか、そもそも幸せとは何か、という点から新たな仮説を立て、人間にとってより幸せなお買い物とはどんなものかを実際に取ったデータから考察しています。

前半部分で心理学難しそうだなあと感じた方でも、後半の私の研究を読むと「そんなことでも良いのか」と感じませんか？皆さんも心理学研究室で身近な心の疑問を科学的に検証してみませんか。

鈴木風花 学士課程4年

中間報告中の著者の様子



月刊
名大文学部
第136号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2023年11月10日発行